

出征軍人と日吉神社参拝

下図の参拝記録が、日吉神社に残されている。

一人前の男子は、徴兵年齢の二十歳に達しなくても、「どうせ、取られるならば、志願して上級の兵になっているのが得策だ」と言う事で、愛国心に燃えた若人は進んで兵役につく努力をしたし、政府も適齢年に達しなくても、次々と若い男子を採用した。

また、戦局が多難になるにつれて、壮年や老人まで軍隊に徴兵した。

最近、亡くなった方の遺品を整理する機会があつたが、敗戦直前に恐らく四十台後半で召集された方の、奉公袋の中には「遺書・遺髪・遺爪」までも残されているのを見て、当時の切羽詰まつた情勢をしみじみ感じ「恐ろしい時代であつた」のを実感した。

残されて生産活動に励んだ、婦人や老人は、なれない手で生産に励み、また機業場は夫々軍需のものを生産するために転職させられ、写真のように宣誓文を書いて日吉神社に誓っている。

また、都市部の児童には、空襲を避けて「疎開」が始まり、法林寺に疎開してきた児童の安全を町長の森 喜平が神前に祈っている。

皇紀二千六百年は、昭和十九年に当たるので、戦地に赴く軍人は、戦地に赴く若兵又は老齢の軍人たちは、

日吉神社の社頭で記帳し「武運長久」を、近所隣の人々に祈つて貰い、寺井駅から夫々の地の部隊へ、地味で目立たないように出発していった。

